

---

# 薔薇の憂鬱

吉ノ蔵 戒兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

薔薇の憂鬱

### 【Nコード】

N2156L

### 【作者名】

壱ノ蔵 戒兎

### 【あらすじ】

妙な色気のある女の子といかついオールバック男のお話。

## プロローグ

プロローグ

「で？

いくら？」

俺はもう何度も繰り返し返されたやりとりに正直ウンザリしてた。

この商売を始めたときは、

そうでもなかったが、

今となつては何でこんなの引き受けたんだろう？

と、

後悔みたいなものを感じていいなら、

たぶん、

それと似たようなものを感じてるんだと思う。

「2000万ダラス・・・」

俺はデスクの上で、

小切手に金額を書き込みながら、

年端も過ぎない女の子の隣に立つ小奇麗とは言えないババアの顔を  
見た。

(目、

死んでるじゃねえか)

「じゃ、

こっちにサインと拇印押してくんねえ？」

俺が言つと女は、

獲物を見つけたハイエナみたいに書類をつかみとり、  
汚い字でサインした。

拇印を押した後、  
ティッシュで指を拭くのもまどろっこしいのか、  
簡単に拭くと、

俺から小切手を渡されるのを今か今かと待ち焦がれているような感  
じだった。

「じゃ、

手続きはこれで終わりだが……。  
注意事項が1つある。

わかってると思うが他言無用だ。  
情報が漏れたことがわかり次第、お命頂戴しに行くんで  
それでよければ」

「は……はい。

勿論です。

誰にも……」

俺は女に最後まで言わず小切手を渡すと、  
事務所から追い出し、  
換気扇をフルにまわした。

## 第1章 始まりの鐘鳴り響くとき

(はぁ・・・)

俺は長い廊下を歩きながら、  
大きくため息をついた。

人手不足の解決をカンパニーから催促され続けることに疲れてた俺  
は、  
使える人間に「どんなのででもいいから連れて来い」  
と指示を出しはしたが、

正直、

まさか、

あんな小さな、お赤飯すらまだ炊いてもらってないような女の子を  
連れてこられるとは思ってもみなかったのだ。

(けどなあ。

小切手切っちゃったしなあ・・・。

今更引けないし。

無理やり押し倒すしかなくね?)

珍しくカンパニーの首領から呼び出しをくらったのが、  
つい1時間前のこと。

首領が顔だすことなんか滅多にない今の時代に、

首領の顔を見たことがないカンパニー要員なんかザラにいる。

(なのに何で俺、呼び出されんの?)

やっぱこの間飼った女のことだよな。

それしかないよな・・・。

俺はそんなことを考えながら、  
首領室のドアを叩いた。

「キミが、

<クルス>か？

初めまして。

私は、

カンパニーの首領、

アカツキよ。

コードネームは、<サイレント・ノイズ>。

以後よろしく。

どうぞ

部屋の椅子にかけて俺を待っていたのは、  
女だった。

どこかの大企業のスーパー秘書みたいに、  
黒いスーツに身を包み、

スリットの入ったタイトスカートからおみ足がのぞく。

むっちりとした体を包むそれは、

どこか妖艶だった。

「失礼します。

この度は」

女の許しがあったので俺は、  
遠慮がちにソファにかけた。

本社に赴くために着たスーツは着慣れないせいも少し窮屈だった。

「堅苦しいのはやめて頂戴。  
私そういうの好きじゃないの。  
ねえ？」

あなたも今日ここに呼ばれた意味は多少理解しているとは思っけど、  
あなたのとこに捕獲された女の子のことだけねど。

あの子について別口で少し調べさせたの。  
そしたらね、

凄い情報をつかんだのよ。

こちらとしては、  
あの子を従来通り商品化するわけにはいかない事態になってしまっ  
たというわけ」

首領アカツキは、  
言いながら書類の束を俺に差し出した。

彼女が近づくとムスクっぽい香りが漂い、  
俺の脳は本能を呼び覚まそうと敏感になっている。

「これは？」

「調査報告書よ。」

これを読めば納得してくれると思うんだけど」

俺は思わず生唾を飲んでしまった。

瞬間、  
扉を叩く音。

恐らく秘書がお茶を持ってきてくれたんだろうが、  
俺はその小さな音にさえ心臓をわしづかみにされていた。

クリップで留めてある一番最初のページに、  
極秘ファイル社外持ち出し禁止、とある。

「ねえ？」

時間はたつぷりあるわ。

あなたの今日の予定はすべて、

私の部下に任せてあるわ。

ここでそれを読んで、

感想を聞かせて頂戴。

もちろん、

感想を聞くまで私はあなたを拘束する」

(厄介だな……)

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

日差しの強い日だった。

午後までは、

カラリと晴れた気持ちのいい日。

だが、

深夜になって突然の雷鳴。

雨はしだいに強くなっていった。

暖炉の揺り椅子の前で、

男は紫煙をくゆらせていたが、

ふと窓に視線をそらした。

ソファでは、

愛する女が気づけば転寝をしていた。  
まったく、

風邪をひくからやめなさいと何度言っても彼女は聞かないのだ。  
話し声が聞こえなくなったかと思っただら彼女は、  
いつもソファで吐息をたてている。

天井から下がっているシャンデリアの光に反射して、  
窓ガラスに愛しい女の寝顔がうつすら映っていた。

男は読みかけの革表紙の書物にしおりをはさむと、  
立ち上がり、  
彼女の寝顔を見つめた。

金色の長い髪が腰まで螺旋を描くかのように、  
くるくると巻かれている。

長い睫は、  
彼女の瞳をより際立たせる。

細い体をネコのように丸めて眠る姿は、  
実に愛らしい。

男は、  
彼女の体にそっと触れた。

絨毯に膝をついてから、  
彼女の両足の隙間に手を差し込む。

柔らかな質感に、  
胸の鼓動が高まるが、  
彼は彼女を抱き寝室へと足を進めた。  
甘い匂いに酔いしれそうになりながら。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2156/>

---

薔薇の憂鬱

2010年10月28日06時32分発行